

「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるから(マ 8:21) 希望なのだ(8:20)。動植物が共にうめき(8:22)、私たちもうめきながら待ち望む(8:23)。

当時の人々にとって、牛や羊が共に生きていることはあまりに自明で、家畜が食べる野の草にまで共棲感覚は及んでいただろう。だから聖書の民にとって、環境の変化は生死に直結する恐れなのだ。

さらに踏み込んで、殺して食べる肉や魚には「滅びへの隷属」イメージがあり、被造物の解放には食べる者の痛みや感謝が反映されてはいないか。

生きる感覚には、命を食べていくことの厳粛さがある。

青年の頃、食べる者の責任として屠場経験をしたいと願った。また鶏くらいは自分の手で絞めてみたいとも。

目標は立派だったが、実現したのは魚をさばいたことがせいぜいで、怖れて手早くやったため雑な切身になった。こうした青春の試みと蹉跎からか、聖書の民の心性にいくらか共感できる。

復活したイエスは使徒の前に現れ、彼らの「不信仰とかたくなな心をおとがめになった(マルコ 16:14)」。使徒の何をとがめたのか。「復活されたイエスを見た人々の言うことを信じなかった(16:14)」ことを。

それを「見た人々」とは誰か。マグダラのマリア(16:11)と二人の弟子(16:13)。

信じないことを叱られた使徒は、復活の証人になるはまだ不十分な感じだが、もうその時に重要な使命が与えられる。

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい(16:15)」。使徒らはエルサレム辺りに留まり、地中海周辺の「全世界(当時の)」に福音を宣べ伝えたのは次世代のパウロたちだった。

とはいえ、パウロ以前から福音は、すでに遠くローマにまで届けられていた(マ 1:8,16:3~4)。

興味深いことは、福音を伝える対象を「すべての造られたものに(マルコ 16:15)」としているところ。動植物にどうやって福音を伝えよ、というのか。これをどう解すればいいのか。

福島原発事故後の映像で、畜舎で餓死した牛馬や、置き去りのワンやニャンを見てひどく胸が痛んだ。動物たちの悲惨から「フクシマ」という現実の深刻さを垣間見た気がした。

現代でもなお私たちには被造物と共棲している感覚があるらしい。それが人間の姿をえぐり出す。だから福音は被造物にも伝えられる(6:15)。

復活のイエスからの福音が、おびたしい命を介して伝えられた。そして今ここで受け取り、それを手渡していく。実際、どんなことをするのか。

イエスの名によって「悪霊を追い出し、新しい言葉を語る(16:17)」。はい、そういたします。「手で蛇をつかみ(16:18)」、えっ、それは無理です。

「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった(創世 3:1)」。被造物の内、嫌いな蛇とも共棲し、しかもその「賢さ」に誘惑されず、「毒」に毒されない(マルコ 16:18)ということならば、そのように進んで参ります。

賢さにも毒にも意味がある。福音は、教会においてこれらを大胆に用いる。

信じる者は(16:17)、「病人に手を置けば治る(16:18)」。人間の能力ではなく、信じるその福音に力があるのだから。

「すべての造られたものに福音を宣べ伝え(16:15)」、造られた被造物と共に呼吸し、その命をいただく。私たちはこのようにキリストの永遠の命に与り、聖餐式ではその体を、食べる。



《おまけのひとこと》

命は 被造物の間を行き来している 命をのびのびと往来させる福音の力 福音はキリストの声 注がれる太陽エネルギーで命の交換がなされるように 命は相互にキリストを響き合わせている